

検査のパレット

今回は胆嚢の働きと腹部の超音波検査、胆石症についてお話ししました。今回は急性胆嚢炎、胆嚢腫瘍についてお話しします。

○急性胆嚢炎

急性胆嚢炎とは、胆嚢で起こる急性の炎症のことです。主な原因は結石が胆嚢の出口付近につまることで胆嚢壁が弱くなり、そこに細菌感染が加わることで発症します。

症状としてはお腹の中心から右側にかけての痛みや吐き気、発熱などがあります。このことから、超音波検査では器械（プローブ）による圧痛の有無も急性胆嚢炎を疑う超音波所見のひとつになります。胆嚢の壁は通常1～2mm程度ですが、胆嚢に炎症が起こると胆嚢の壁が厚みを帯びます。また胆嚢が腫大し、通常であれば2～3cm程度の胆嚢の短径が3.5cm以上と増大してきます。胆石によって誘発されることが多く、胆石が胆嚢の出口や胆管（胆嚢の出口から十二指腸までの道）に詰まっていないかなどを観察していきます。

○胆嚢腫瘍

胆嚢腫瘍には主に良性のもので胆嚢ポリープ、悪性のもので胆嚢がんがあります。今回は主に胆嚢の悪性腫瘍である胆嚢がんについてお話しします。胆嚢がんとは胆嚢に発生したがんのことで、一般的な症状として食欲不振や体重減少があり、進行してくると黄疸、上腹部の疼痛、右の肋骨近傍に腫瘤が触れるなどします。

超音波検査では胆嚢の内側に胆嚢壁との境界がはっきりしないエコー像を認め、浸潤することによって胆嚢の壁が不整に厚みを帯びたり、胆嚢の外にまで成長して正常の胆嚢の壁として捉えられなかったりします。また、くびれがある（有茎性）のものは良性（ポリープ）であることが多く、山のように発達しくびれの無いものに悪性が多いとされています。胆嚢はその臓器の性状により、転移のしやすいがんなので、周囲の臓器との連続性などを念入りに観察していきます。

食事を摂ると胆嚢は胆汁を十二指腸に送るため、縮小してしまいます。縮小した胆嚢は観察しづらく、腹部エコーをする際には食事を抜いてきていただくようお願いしています。また胆嚢の内容物の動きをみる際には、患者様の体位変換などのご協力が不可欠です。よりよい検査結果のためのご協力をよろしくお願いいたします。



（参考文献）病気が見える 消化器 vol1

日超検 腹部超音波テキスト 第2版

文責 藤澤 悠 監修 永田 拓生